

〈資料の紹介と研究〉 帝国実業講習会と渋沢栄一の『実践商業道德講話』

——大正期実業教育の一側面—— (下)

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

渋沢栄一は、信用こそが商工業の基礎をなすことを力説する。とくに、日本が対外的に飛躍しようとするのならば、信用の確立が先決問題である。また、商売に必要なのは、目先の智でなく真正で根本的な知識である。真正の知識は仁義と一致する。強い意志をもち、小事にも大事にも全精神を集中して当たるならば、そのとき成功が勝ちとられる。そして商売取引は、売る者も買う者ともに益するのであり、ここが投機とも戦争とも異なる所以である。こう説いた渋沢は、道德と商工業者の事業とを結びつけるのが「真の知識」であることを強調する。こうした立論は、精神なき資本主義の跋扈にたいして渋沢が抱いている危機意識を反映したものである。

キーワード：実業教育、渋沢栄一、実業之日本社、商業道德、関東大震災

9 信用を以て立つべき商工業者の不信用

孔子が教えた通り、信は人類の総てが等しく守らなくてはならないものであり、とくに商人にたいしてのみ限る理由はない。世人が、商人にのみ必要な道德があるかのように説くのは、私には不快で遺憾である。もっとも、商工業者は殖利生産に従事するから、不道德を冒しても利益を収めようとしやすい性質をもち、これは業務そのものにともなう病と言うべきものなのかもしれない。とくに維新前の商工業者は、他の階級からつねに卑下され、士人と商人とは同席で談話もできなかったくらいである。そして商人は、自分で自分を卑下し、品格を高めたり知識をすすめるといった念はほとんどなく、ただ利益を収めれば足るとして、目的のためには手段を選ばなくともよしとするようであった。

維新後は、商工業者の位置が高まり、実業家にたいして世人も尊敬を払うようになったが、物質文明を輸入するのに急であったため、道德の修養が比較的軽視せられ、実業家は仁義道德の觀念があつてはだめだという妄想がいまだに抜けきらない。信を以て立たなくてはならな

い事業に従っている者のなかでも、信に反し信用を傷つけるような不正行為が続出している。わが国の商品が海外において信用を墜としつつあるのも、銀行家が投機で失敗して多数の預金者に迷惑を与えるのも、売買の約束を結びながら相場が下落したために品を引きとらず⁽⁵²⁾、あるいは相場が上がったために品を引きわたさなかったりするもの、信を忘れ、みずから信用を破りつつある現象である（渋沢栄一 1923c：12～13頁）。

10 『嘘も方便』は大なる間違ひ

世間で「嘘も方便」とか「商売の駆け引き」とか言われているが、これはじつに大間違ひの考えであり、商人がみずからその看板に泥を塗っているようなものである。ところが、高等教育を受けた人でさえもこう感じているのだから、驚かざるをえない。

三十年ほど前、私の懇意の友人で、伊達家の家令を勤めていた人から、晚餐に招かれたことがある。この人の婿は帝国大学の工科を卒業した人だが、彼は、しきりに商人には駆け引きが必要だと説き、自分は実業家となってからしみじみとその必要を実際に痛感すると臆面もなく話していた。私は、これを聞いて非常に不愉快に感じ、舅の前であつたが、彼を叱つたのである。君のように高等教育を受けた人が、左様にまちがった考えを懐いているようでは困る。君のような人が他人を欺いて利益を収めるのを当然とするようでは、^{ただ}管に不道德であるばかりでなく、商人の信用を高めることが永久にできなくなる。人を欺くことを方便として、平気でこれをおこなうことは、罪惡を重ねるものである。些々たる問題であれば、不道理と思う他人の説を聞きながすことがあつても、商売上のことで人を欺くというのは非常な罪惡であり、人として世に立つ所以でない。実業家たる者は、自分は神仏に誓って虚言を言わず、虚言を言ったことがあれば処罰されてもいいというくらいの信念をもって立たなくてはならない。営業のためであるから嘘も方便などというのは大きな間違ひである。丁稚小僧が、客に向かって、これはお丈夫です、これはお安いと言うのですら、事実反していれば嘘になり、その商店の信用を傷つけて衰頹^{もとい}の基となる。君のごとき大学を卒業した者が、かくのごときことを言うとは何たる誤謬か。私はじつに聞き捨てがならないと説破した。この工学士も、そうやかましく言われては困るとしきりに陳弁したが、そばで聞いていた舅は、私の言の理の当然なることに敬服した。

これは昔の話だが、今日になってもこの工学士と同じ謬想を有し、それをおこなっている者がすくなくない。情けないことであり、商人の信用が高まらない所以がここにある。したがって、わが国の商人が世界の大大勢について対外的におおいに飛躍しようとするならば、第一にこの点を改めなくてはならないのである（前掲書：13～14頁）。

11 誠実は商売の根本要素

商工業者の心に誠があれば、自然にそれが言動に現れてくる。逆に、心に誠のない人の言動

には、その虚偽が含まれており、それは早晚馬脚を現すものである。誠意なき商人は、約束に背き、虚言を構え、駆け引きをし、粗製濫造品を輸出して利益を収める。しかしこの利益は一時のものである。ある商品を期日までにこれだけの数量送るよう外国から注文を受け、これを承諾しながら間に合わないようでは、外国の商人はその計画が狂い、大きな損失を被る。また、期日通りに送っていても、数量が不足していたり、見本と実物とがちがっていたり、1 ダースのはずが 11 個しかなかったり、容器一杯に充填されているべきものが八分目までしかなかったりといったことをしばしば聞かされる。とくにインドまたは南洋方面においてこういう苦情が多いということである。

商人に誠意があれば、このような不信用の取り引きはできないはずであり、かかる我利私慾を働けば、たちまち排斥される。ましてわが国の事情に通じている外国人とのあいだの取り引きにおいてかかる不信用の行為があれば、一も二もなく排斥され、ついに得意先を失うことになる。嘘も方便と、一時的に对手を欺いて暴利をむさぼることがあっても、いつかはそれが発覚し、その行為が日本人全体の不信用となり、自分の商売が衰えて社会から葬られるのみならず、日本の商人・商売全体に泥を塗るにいたるのである。

そもそも、生産殖利は道德のなかに含蓄されうるもので、殖利を完全にやっていくには、ぜひとも道德が必要である。事業の完全な経営や、製品の市場における好評は、営業上の行為が道理正しく処理されてはじめて得られるものである。誠意ある商工業家が年とともに繁栄するのはこのためであり、富と道理、誠実と利益とは両立しないなどと心得ている者がいるのは、なんという謬見・誤解であろう（前掲書：14～16 頁）。

12 誠実なる人は最後の勝利を得

イギリスの商人は、さすがに世界を相手にしているだけあって、誠実をもって事に当たり、信用をもって業を営んでいく。「嘘をつかぬが商人の資本」「信用は資本なり」といい、商業道德を重んずべきことを教えている。イギリスでは、彼は商人であるがゆえに彼の言ったことに間違いはないとまで信用されている。

元来、実業家が道理ある事業を営んで利益を上げるのに、人を欺きみずからを偽る必要はないはずである。道德とも衝突せず、仁義にも悖反せず、公益を害しない範囲において富は得られるものである。またこのようにして得られた富が真に尊敬すべきものである。しかるに、こちらが信用をもって立ち、誠意をもって業務を営んでいる場合でも、对手が不誠実な人であれば、あるいは欺かれることなしとしない。しかし結局は誠実の人が勝ちを占める。故古川市兵衛氏は、学問もなく、ある点では品行の修まらぬところもあったが、けっして偽りを言わない真実心の人であった。氏は鉱山業に熱心であり、不正な鉱山師が良質の鉱石を見本としてその鉱山を売りつけ、そのため氏は数万円の損失を被ったことがあった。しかし氏は、欺かれた自分が悪かったのだといって頓着せず、誠実をもって事業に取りくんだ。一方その欺いた人は、

その後ついに零落し、欺かれた氏がかえって大鉱山業者となったのである（前掲書：16頁）。

13 連邦準備銀行総裁ストロング氏

日米両国の商工家を見渡すと、残念ながら、誠実の点において日本人に遜色がありはしないかと思う。上に立つ人はもちろん、下級の一般人にいたるまで、アメリカ人の真摯の程度は日本人の上にあるように思われる。総じてアメリカ人は、互いに戒めあって偽りを言わず、他人を欺かないことを第一としている。

ニューヨークの連邦準備銀行の総裁ベンジャミン・ストロング氏のことが思いおこされる。わが国は、ドイツの中央銀行に倣って、明治15年に日本銀行を創立したが、その頃アメリカの銀行は個々分立して統一を欠いていた。しかし大正4年に私が渡米したさい、その前年から連邦準備制度が敷かれ、全国に12の連邦準備銀行があり、これを統一するためにワシントン市に中央局があった。各連邦準備銀行は兌換券の発行権を有し、必要におうじて金融界を調節する力を有していた。そこで私は、ストロング氏を訪問し、同氏の担当している連邦準備銀行について二箇条の質問を提出した。その一は、アメリカに新たに連邦準備銀行と中央局とが設立されたが、追々業務が繁昌してくると、準備銀行と取引銀行とのあいだに競争の弊が生じ、たがいに不平不満が起ころしはしないか、もしもありとすれば、いかにしてこれに処するかということであった。その二は、中央銀行ができると、金融が政治と癒着し、政治が金融を牽制し、または圧迫することはないかということであった。

ストロング氏は、自分はまだ総裁になったばかりで、経験が浅く、お答えすることができないので、研究を積むまでこの問題は保留したいと言われた。それから5年後の大正9年に、氏は来日して私の事務所を来訪された。氏によると、当時は創立早々でお答えすべきなんらの材料もなかったので、事実のままを申し述べたが、その後金融界は欧洲大戦によって急激な大変化を被り、自分も非常に心配したが、さいわい無事に経過し、自分の勤務中にやや要領を得たこともあるから、先年のご質問に答えるために来たとのことであった。第一点については、ご指摘のように、面倒が生じたが、これを捌くには、たんに法規のみに拠らず、これを運用する者の忠誠と常識をもって処理し、自己の利益や都合のみを計らないことをたがいに誓い、相譲りあい相助けることを申しあわせたので、不平不満を回避することができた。第二点については、アメリカでは政治よりも実業の勢力が強く、ややもすれば実業が政治を利用することがあるが、政治が実業を圧することはないということである。

私がここにこれを挙げたのは、質問者である私が忘れたくらいの長い年月を経た後に、先年の約束だからといって答える親切・誠実な態度に敬服するからである。ここに平生の心がけがみえると思った。アメリカ人にはこういう例はけっして稀でない。その心に誠意があるから、事業に対しても常に忠実であり、したがってすべての方面においてその信用を大切にしようになるのである（前掲書：16～18頁）。

『講話』の内容 (三) 実業に必要な知識

14 是非善悪に対する公平なる判断

事に処し、人に接する場合には、面倒な問題も起きるものである。そのとき、相手に従うのがいいか、それともみずから信ずるところを遂行するのが正しいか、あるいは利益を失うとも従うべきでないのかといった問題は、つねに起こることである。またそれは、多くの場合予測されないところにかかるものである。

こうした問題に直面して、その軽重当否を公平に分別し、重に就き尊きに従って、誤らないようにするには、智を磨くことがもっとも大切である。知識が不足しては、十分に事の是非を弁別することができず、物の善悪や是非を弁別することのできない人、正邪得失の鑑別に欠けた人は、世に処して正しい道をすすむことができない。

ここに言う真の知識は、総じて事物の道理を明らかにし、人の従うべき準拠を判断することである。『大学』巻頭にある大学の八條目の最後に、「知るを致すは物に格るにあり」という句がある。知るを致すというのは、自分の知識を押し広めて、天下の事物において知らないことがないようにすることで、物に格るというのは、事物の道理を一々の事物について究め、その極めるところ到らざるなきに至ろうとすることである。このように事物の道理を究めつくしたところに、真の知識が完全にすすむのである (前掲書：18～19 頁)。

15 実業に対する維新前の誤れる思想

知識は、実業家がその業務を営んでいく場合にとくに必要である。金融、製造、卸売・小売など、もっとも広い意味で物の取り引きに従事し、生産殖利に任ずるすべての事業をすすめていくには、真の知識を完全に備えることがもっとも必要である。真の知識を備えて、すべての事物に接して道理にしたがった判断を下すとともに、仕事の上でもつねに違算なきことを期さなくてはならない。

維新前にも、学問をすれば商売に疎くなるとか、商売人は仁義道德の觀念があつてはダメだとかいう思想が流布され、商売は卑しく、商売人は下級のものとみなされていた。社会の階級においても、商売人は最下級に置かれた。これは当時の商売人の心がけもまちがっていたためであるが、私は、欧米諸国が隆盛となったのは、まったく商工業者の地位が向上し、その事業が進展したためであり、日本も、現状のままでは見込みがないので、国家のために商工業の発達を図りたいと考え、退官して銀行業に従事したのである。今日なお欧米に及ばないところがあるにしても、経済が国家を治める主力を有するようになった。しかし経済の実力は主として商工業にあり、その商工業もまた学問的知識を基とする必要がある。

常識が発達し、言語挙動がすべて中庸に適うことは善いことだが、他方、真の知識を完全に備えなくてはならない。古人は「学は天人を貫き、才は文武を兼ね」と言った。実業家として

立つ者は、このくらいの意気込みをもって知識を具備することを期さなくてはならない（前掲書：19～20頁）。

16 根本的に真正なる知識が必要

実業家が世に立つためには、根本的に十分な知識を具えてかからなくてはならないのであって、浅薄な知識でその場を間に合わせれば足ると思うのは大きな間違いである。実業家となるにも種々の学問が必要である。

この知識は真正な根本的なものでなくてはならず、目先の智ではいけない。一時を如才なく振るまうのが知識であるかのような誤解があるが、それは鼻先だけの智であって、いわゆる物知りと称するにとどまり、奥底から完全に知ったことにならない。実業家たる者は奥底から知らなくてはならない。

もっとも、ひとりですべてのことを知りぬくことは、人の能力の及ばぬところである。ゆえにその主とするところを十分に知って、その他は概略にしてもいい。しかしその主とするところを知るには、学問と密接することが必要で、そこにおいてはじめて知識の完全が望まれる。

こうした知識にあっては、細かい点にまで立ちいって知るのみならず、学理的に知らなくてはならない。たとえば、銀行なり商売なりを経営するには、十分にその道の知識を具備して、この働きはこういうふうになると、じつに学問上より知っていないと、健全な経営は望まれない。殊に新しい事業を始める場合には、ややもすればそれが時代に適應しないことがあるから、完全な知識によって時代に應用させなくてはならない。

私が明治六年に第一銀行を興したときは、新式の銀行業のなんたるかを知る者がなかった。この場合に、外国流の銀行業をそのまま完全にわが国に移しても時勢に適應しない。時勢に適應させるためには、最終的にはここまで行かなくてはならないことを熟知しながら、いまはこの程度にとどめ、徐々に改善するという態度をもってしなくてはならない。また時代に適應するとしても、銀行業の本義を根底より知ったものでなくては、真に時勢に適應したと言うことはできない。ゆえに、根本的にその道理を知った者がはじめて、その時勢に適應して宜しきを制することができるのである（前掲書：20～21頁）。

17 経済と道德と知識との相互関係

経済と道德とは一致すべきものであり、私はこの信念の下に論語と算盤とを調和させてきた。ある場合には、両者が衝突するかのようにみえることがあっても、それは孔子の本領を見違えたものであり、私は両者間になんらの不調和を発見しないのである。同様に、学理と実際とはかならず一致すべきものであるが、ある場合には一致しないことがないわけではない。学理上はそうでもあろうが、実際においてはこうだと反対の事実を挙げることは、世間によく聞くことである。これは学理と実際とのいずれかに誤りがあるのであり、一致させるところに真の学

問の価値がある。

また、知識はとかく道徳や仁義と衝突することがある。真正の知識は仁義と一致するはずだが、知に走る弊として、ややもすると忠恕の念が薄くなり、親切の情がすくなくなることがある。こういう人は、眼前の場合だけを巧みに取り繕い、それをもって道理に適うものとみなし、はなはだしい場合には狡知に流れて悪賢くなる。知ったかぶりをして浅薄な知識を振りまわし、あるいはこれを濫用して人に迷惑と損害とを与え、自分もまた不信用を受けるのである。これらは知識の弊であって、これがあるがために真の知識を疎外するのは間違いの極みである（前掲書：21～22頁）。

18 岩崎弥太郎氏と古河市兵衛氏

成功者の為し来たった蹟をみると、じつに周到な注意が行き届いている。故岩崎弥太郎氏はその一人である。彼は各方面に非凡な能力があったが、とくに海運業について特殊な知識をもっていたように思われる。海運経営の原理、航海の方法等において研究的知識が豊富だったから、資本がすくなかったが、学理的にこれを経営し、三菱の基を樹てたのである。私は、一時同氏の事業と競争したこともあるが、それは、海運事業が独占されてしまうのを不可としたためであった。

また、学問はなかったが、その事業にたいして特殊の知識を有っていたのは、故古河市兵衛氏であった。この人は、文筆に無頓着で、新聞に特筆されている大問題でも、自分に関係したこと以外にはまったくわれ関せずであった。しかし鉦山にかんしては、常人の遠く及ばぬ知識を備えていた。その知識は不権衡であるが、自分の知るべきことは徹底的に知っていた。自分の研究以外に、学者からも聞き、普通人の説にも耳を傾けた。青山という田舎の老人を重用し、鉦山事業で重大なことはよくこの人に相談していた。氏が人を使うのも、学問的に応用したものではないが、帰するところは真正の知識に基づいた方法と一致していた。たんなる目先の知識に出たのではなかった。

すべての事業は、たんに如才なく、一時の僥倖を期しておこないうるものではない。成功する者には成功するだけの基礎があり、徹底的に知識を応用してこれをおこなうところに成功の道が開かれるのである（前掲書：22～23頁）。

19 如何なる場合にも天道は必ず是

『中庸』に、「学を好むは知に近く、力めて行ふは仁に近く、恥を知るは勇に近し。この三者を知れば則ち身を修むる所以を知る」とある。知・仁・勇の三徳を挙げたもので、なかでももっとも急なるのは知である。

私の友人に平岡準蔵という人が会った。旧幕府の旗本で身柄の人だったが、徳川慶喜公の御身の上を心配し、私とともに種々の方法を講じた。この人は立派な人格者で、忠君で故旧に厚

かったが、どうも社会的に発展することができなかった。なにをしてもうまくいかない。他人からも尊敬されない。財産もできない。彼は嘆息して、じつに天道は是か非かわからないと言
うのだが、私は、それにたいして、志が立派でも、仕方が拙であってはならず、志が立派で、
仕方も巧みであってはじめて結果が挙がるのだと述べた。孟子は、いかに親切の志があっても、
その人の為すところが不為になれば、受ける人はこれを嫌うのにたいして、志が善くなくとも、
その為すことが親切に適ったことであれば、親切の効が現れて、報酬も受けることができると
説いた。志にたいする報酬よりも、仕方にたいする報酬のほうがはるかに多いのである。平岡
氏の嘆の場合、本人の知識が足りないのであって、天道はもとより是であるというのが私の答
であった。

世の中には、善良の志がありながら、その仕方がこれに伴わないものがすくなくない。その
仕方の拙劣というのは、つまり知識が足りないからである。完全なる知識が足りないがゆえに、
適切に処理することができないのである（前掲書：23～24頁）。

『講話』の内容（四）事物に精神を集中する方法

20 成功と否とは勉強の有無

商人がその商業を発達させるには、たんに知っているだけでは不足であり、その知ったこと
を実現させなくては完全な域に達するものでない。教育でも実業でも政治でも、それが成功す
るか否かは、帰するところ完全な勉強の有無にある。元來人の能力は同じでなく、境遇も異なる。
しかし人は誰でも勉強一つによって大いにその仕事をなすことができる。最初から偉大な
者などおらず、自己の勉強により荊棘けいきよくを拓いて大成するのである。貧しき農夫より身を起こし
て大事業家となり大商人となる者もいれば、小事業家・小商人にとどまる者もいる。その主要
な理由はその人の勉強の如何による。人の能力に差があっても、真にその仕事に勉強すれば、
その程度におうじて進歩し発達することは、われわれが日常に見聞することである（前掲書：
24～25頁）。

21 勉強の真の意義

よく世間には、「これから大いに勉強する」と言う人がいる。しかし、勉強する者が、時を
定めて、これから大いにやるなどというのは、真の勉強でない。勉強とは、その仕事に努力す
るばかりでなく、遊ぶときにもまた勉強でなくてはならないのである。働くときに渾身の精力
を籠めて働くと同じく、遊ぶ場合にもその疲労を癒すべく十分に遊ぶ必要がある。人間は間断
なく仕事をしておられるものではなく、食事・睡眠・休息が必要だから、これらのことにも充
分精神を込めるほどの人でなくては、働くときにも充分精神を込めることができない。休養に
精神を込める人にして、はじめて完全に心身を打ちこんで成就せしめることができるのである。

朝目覚めたときから夜眠りに就くまで、同一の仕事に従事しなくてはならないということはない。これは、人により、仕事によって定まることであって、従事する仕事の多少を標準として、ただちにその人の勉強の有無と大小を判断することはできない。しからば、勉強とは如何なることであるかという、私は、ある事柄に全力を打ちこむということだと思える。一事一物を満足に成しとげようとして、精神をそれに集中して当たることだと思う。ゆえに、一つの仕事にのみ従事するのがかならずしも勉強でなく、数多の仕事に関係しても、その各々の仕事に精神を集中することができれば、それが勉強であって、その仕事は成就する。一事一物に精神を集中すれば、その事物一つしかできないのだが、その一つを完全におこなえば、次には他の事物を完全におこない、かくして次第に他の事物をも完全に仕遂げることもできるのである。しかるに、幾多の仕事に関係して、精神を集中せざる者は、手を広げても、仕事は一つも満足にできない結果になる（前掲書：25～26頁）。

22 多数の事業に従事する私の態度

私は、従来この方針をもって世に処してきた。私の家訓である『处世接物の綱領』五に、「凡そ一事を為し一物に接するにも必ず満身の精神を以てすべし、瑣事たりとも之を苟且^{こつしよ}に付すべからず」という一項がある。事物の大小軽重を問わず、必ず一意専念これを処理せよという意味で、ここで勉強せよと言っているのと同じ意味である。私は平生この主義を守っている。一本の手紙を書くとき、筆を執って紙にたいするあいだは、精神をそのことに集中して、他のことは考えないようにする。手紙のように、人を相手にする場合には、万一まちがったことや相手に悪感を懐かせるようなことを書きおくれれば、これを取りけすことも訂正もされない。ゆえに手紙を書く場合にはとくに注意に注意を重ねてやらなくてはならない。それがいかに小事・瑣事であっても、つねに全精神を打ちこんでやる習慣をつけなくてはならない。小事物が集まって大事物となり、軽い事が合して重い事になるのだから、小事物だからといってこれを軽視することはできない。

こうして小事にも大事にも全精神を集中して当たれば、そのことは必ず成就する。この心をもってすれば、同一のことも、また種々の変わったことをおこなっても、それがまた各々完全におこなわれる。往年、私は、わが国の実業振興を念として、種々の事業を計画し、不肖ながら自分が関係すればその事業が成立するからと言って勧誘され、参加したこともあり、一身で多数の会社事業に関係を有ったことがある。当時世間では、私がいかに多くの事業に関係するのを非難する者もあった。今日の私は、実業界を引退し、銀行会社とはぜんぜん関係を絶っているが、相談をかけられる人があれば、できるだけこれに応じている。私は、多数の事業に関係したときにも、自分の名を出している仕事にたいしては、如何なる場合においても、必ず相当のことを為し来たったつもりである。たんに名を列ねるにとどまることは、私の良心の許さぬことであった。重役会議がある場合には、その社の事業に精神を集中して協議に与る。社

会事業の相談会があれば、また同じくそのことに精神を集中して当たる。次々に来る事業にたいしても同様に集中した精神をもってこれに当たる。したがって、けっして無責任に名を列ねたことはないと信じている（前掲書：26～27頁）。

23 無理な勉強は永続せぬ

大小の事物にたいして、その精神を集中し、全身を打ちこむことがすなわち勉強だが、人には身体に強弱の差がある。強壮ならぬ者が、充分な睡眠もとらず、疲労して卒倒するまで働くことは、勉強の旨意に適したものとは言えない。その身体におうじて限りを尽くすべきである。昔時ならば、私も一日十里の道を歩むことをえたが、いまの私は五七町しか歩くことができない。これは身体が許さないで致し方がない。こういう場合には無理なことをせず、自分の力の限りを使うほかはない。事物に勉強するものはこの点に注意しなくてはならない（前掲書：27～28頁）。

24 仕事の手順と緩急とを考へよ

種々の事物に関係を有するときは、ややもすれば失念したり軽重を誤り前後を誤ることがある。それには寝て考えるのがいいと思う。毎夜眠るまで、あるいは朝起きる前、今日は何を為したか、為し損じたことはないか、明日は何を為すべきか、いかなる約束をしているかと充分に考え、しかして手順よくおこなうよう努める。その考案の時間は十分か十五分あれば充分である。真に仕事に勉強する者は、毎日これをおこなう必要がある。

また、多くの事物に当たる者は、その事物にたいする緩急の別を誤らないように心がけなくてはならない。種々の事物の性質を考え、事の軽重によって前後を定めなくてはならない。国家社会に関することはもっとも重大である。自己に属することは、その利害問題は大きであっても軽くみなくてはならない。私は、^{こんにち}今日もこの標準にしたがって事物の緩急を判断している。生まれてこの世にある者が、国家社会に奉仕するのは、その本能を尽くす所以であって、私はつねに国家社会のことを先にするよう心がけている（前掲書：28頁）。

『講話』の内容（五）目的を貫徹するに必要な忍耐力

25 九俣の功を一簣に欠くことなかれ

総じて世の中のことは、自分の心に思うようにならないことが多い。自分の仕事をよく知り、自己の精力を集中して勉強すれば、その仕事に成功するはずだが、事実においては、必ずしも順序よく運ぶとは限らない。途中に案外な故障が起こって、期待したように目的を達しえない場合がある。外部からの故障ばかりでなく、意思の薄弱な者は、自分の心から故障を起こすことさえもある。この場合には、よく忍耐して、いよいよその事業に精力を傾けなくてはならな

い。仕事が順序よく運ばず、目的も達せられず、心に思う通りにならないときは、自暴自棄に陥る薄志の者もすくなくないが、さらに忍耐して誠実に勉強すれば、いつかは必ずその目的を貫く日が来るものである。ゆえに私は、勉強に次いで忍耐ということを説かなくてはならない。

『論語』に、「子曰く、譬へば山を為るが如し。未だ一簣^{つぐ}を成さずして止むは吾が止むなり」ということがある。世人が「九仞の功を一簣に欠く」というのはそれである。いったん立てた目的あるいは方針にたいしては、けっして途中で挫折するようなことなく、あくまでもこれを貫くように努めなくてはならない。薄志弱行の徒は、途中で挫けることがありがちだが、これでは何事も成しとげることができず、生存競争場裡の劣敗者となるを免れない。いったん立てた目的は、脇目も振らずに勉め、幾多の辛いことや苦しいことがあっても、忍耐して努めなくてはならない（前掲書：28～29頁）。

26 失敗を悲観する者は決して成功せず

商売はもちろんのこと、いやしくも学問教育その他百般の仕事に従事する者は、忍耐がなければけっしてその仕事に成功するものではない。世間には、相当の智慧もあり、事物に考慮が深く、仕事に勉強であれば、とんとん拍子に立身出世する者もあるが、成功すべくして失敗した例はいくらかもある。技術にも経理にも巧みでありながら成績の挙がらない者はすくなくない。事情は種々あるであろうが、多くは忍耐力が足らなかったためである。正直に丹精を尽くして効果が現れないときは、失望し落胆して職業を転ずるとか、あるいは悲観して努力を払わなくなるとかする。結局は人生の落伍者となるのである。

その仕事に失敗した場合に、過去に為し来たったことに過失があったか否かを考えるのは必要であるが、要は誠実に努力して運命の開かれるのを待つがよい。一時の失敗に悲観しないで忍耐して努力を重ねるがよい。あくまでも勉強するならば、いつかはふたたび好運命に際会する時が来る。

人生の航路はさまざまであって、ほとんど一律に論ずることはできないものであるから、時に善人が悪人に負けるごとくみえることもあり、また誠実に勉強する者が順調にすすみえないこともなしとしないだろう。しかし久しきにわたって忍耐するあいだには、善悪の差別が確然とつき、誠実に努力する者が最後の勝利者となる。ことに商業家のごとく有無相通ずることがその業務である場合、その有無を相通じさせることにたいし、自己の勉強如何により、その報酬があるいは多くあるいはすくないこともあるも、その本分を尽くして得た報酬により身を立てるのが商業家最高の道である。いたずらに報酬の多きを欲するために、人道を無視し道徳を軽んずるのは、処世の目的に沿うものでないと同じく、なにかの事情によって報酬が得られないために人生を悲観し、あるいはこれを呪うのもまた大なる誤りである。事の成敗などを思わず、誠実に努力するがよい。努力を続けるあいだに、公平なる天は必ずその人に幸いして、運命を開拓するように仕向けてくれるものである。それには不屈不撓の忍耐が必要となる（前掲

書：29～30頁）。

27 所謂『詰まらぬ仕事』にも忠実なれ

若い人のなかに、先輩や他人が仕事らしい仕事を与えてくれないからつまらないという嘆声を発する者がいる。こういう不平を訴える青年は、まことに自己の無能を他人に吹聴しているのと同じで、男子として恥辱の限りである。^{こんにち}今日は、社会が発達して人材の必要度が高まっており、完全な人物でありさえすれば、必ず需要がある。かりに社会がその人を見出さなくとも、その境遇におうじて全力を傾注し、誠実に勤勉して、つまらぬ仕事をも完全に処理しさえすれば、信用はその人に集まり、求めずして立身出世ができる。

もちろん、その仕事のなかには、青年の嘆ずるようなつまらぬ仕事もあるであろう。しかし、いかなる些細のことでも、それをつまらぬ仕事と考えるのは大なる誤りである。大なれ小なれ、仕事の価値はみな一様であり、事業そのものの上よりみれば、いずれも重要なことばかりで、その一つを欠いても事業は完全にできるものではない。ゆえに、つまらないようにみえる仕事を、一生懸命に喜んでする者が、はじめて、責任をもって仕事をする人というので、重要な仕事を託される人となるのである。立身出世は、みずからこれを造りだすものであって、自己がその職務を忠実に守り、多少の不平があっても、忍耐してこれを抑えていけば、立身出世という栄冠は、世間から必ずその人の頭上に戴かせてくれるものである（前掲書：30～31頁）。

28 私が従来事業に対して守った態度

私が関係した幾多の事業中には、途中で意外の故障が起こって困難が生じた例もけっしてすくなくなかった。総じて事業を興すには、最初が大切で、拙速は危険である。着手がすこし遅れても、十分に綿密に調査し^{かんが}えたるうえで、これなら間違いはなかるうというところで着手し、丹精して事に当たれば、たいていの事業は大過なきを得るものである。しかしそれでも、最初には思いつかなかった意外な故障が突発し、事業の進捗に障害を与えたり、当事者に不行届の点があって、事業が予定の通りにうまくすすまず、損失を招いたりする場合がないでもない。こういう場合に損勘定を精細に取りあつかつて、後始末をつける人でなければ真の事業家でなく、また事業家として成功することができるものでもない私は信じている。事業が逆境に陥っても、跡は野となれ山となれという態度で逃げだすようなことをせず、最後まで忍耐してその事業のために尽力し、それが完全な事業として成功するまで努力しなくてはならない。こういう人は、たとえその事業が失敗しても、結局は成功者になりうるものである。私は、この点については、事業家としての純真なる態度を守ってきたつもりである。その一例として、第一銀行の創立当時について語りたい。

第一国立銀行が開業したのは明治6年7月20日である。資本金の六割に当たる政府発行の不換紙幣を政府に納め、同額の金札引換公債証書を受けとり、これをその銀行の融通資本とし

たのである。残り四割は、金貨を積みたて、望みにおうじて銀行紙幣と交換するという仕組みで、準備金はつねに発行紙幣の三分の二を下らぬ高をもたなくてはならなかった。この仕組みによれば、銀行紙幣を運用して相当の利益を収め、また金札引換公債証書の利息も得られ、預り金、為替、割引等より生ずる利益もあるので、相当の利回りがあると思われた。こうして政府の不換紙幣が銀行の手を介して自然と政府に回収され、不換紙幣が兌換されるわけである。

資本金は二百五十万円であったから、銀行紙幣の発行力はその六割の百五十万円であった。この紙幣は完全な兌換券であったから、請求されれば金貨と引き換えなくてはならなかった。ところが、当時の日本は、名目上は金貨本位国であったが、もともと金がすくなく、実際の金貨国ではなかった。そのため、金貨との引き換えを要求されれば、銀行がとくに金塊を買い入れて金貨として兌換しなくてはならなかった。明治七年の秋頃から、金銀比価の変化により、その引き換え要求が増加し、四つの国立銀行は、あたかも金貨の吐き出し口であるかのような様相を呈し、この年に四行合わせて百三十万円あった銀行紙幣が、翌8年春には二十三万円に減少した。

これより先に、7年の小野組閉店に続いて島田組も閉店した。この両組は、政府および諸県の為替御用、諸官省の出納も取りあつかっていたので、その閉店は当時の経済界に大きな影響を及ぼした。第一国立銀行は、三井組と小野組とで各百万円ずつの大株主であったのみならず、小野組には銀行より多額の貸し付けもあったので、この事件と金貨引き換えとは非常に私を悩ませた。小野組にたいしては、同組の株金百万円をもって同組にたいする貸付金を処分し、8年1月に銀行の資本金を百五十万円に減少して、創業直後の最大の難関を切りぬけた。一方、金貨引き換えが盛んになり、銀行は利益が出なくなったため、同業者中には、廃業しようという意見も出た。営利の銀行家としては、廃業があるいは利益でもあったか知らないが、しかし銀行が廃業すれば、金銭上に障害を来し、わが国経済の発達を阻害するものであると思ったので、自分はあくまでも同業者の廃業論に反対し、他方政府に力説して、9年8月に銀行条例を改正させ、銀行紙幣の交換は当時流通していた政府紙幣（不換紙幣）をもってして差し支えないこと、資本金の八割に相当する公債証書を政府に納めて、同額の紙幣を受けとって発行し、資本金の二割は通貨を積みたてて引き換えに充てることになった。こうして、国立銀行を創立して不換紙幣を兌換するという最初の目的は失われたが、当時の事情としてはやむをえなかった。また、自分が与って立案したものを、自分で改めてもらわなくてはならなかったことは、面目ないと思わないでもなかったが、金融機関の発達という大きな目的のために忍んだのである。

当時の国立銀行は、廃業を考えなくてはならないほどの窮態に陥ったのであるが、私は、国家のために、銀行の必要を信じ、最後まで忍耐してついに条例改正によって銀行事業の発達を企図することができた。もしも営業上の困難のために全国立銀行が廃業していれば、銀行事業が頓挫したのみならず、日本経済の発達に不利を与えていたことであろう（前掲書:31～34頁）。

29 刻苦奮励遂に成功した我貿易業者

今日、外国貿易に従事し、日本と外国とのあいだのみならず、外国と外国とのあいだにも貿易を営み、わが貿易界にもっとも雄大の名声ある三井物産会社も、最初は微々たるもので、幾多の失敗を重ね、廃業のほかなしと非難されたこともある。ただ、当事者が、不屈不撓の勇氣をもって、忍耐に忍耐を重ね、ついに今日の盛況をみるにいたった。当事者が才幹に富み、事業に丹精を凝らしたことは無論だが、不屈の忍耐が今日をなしたことを思わなくてはならない。

同じく、外国貿易に従事して成功したものに堀越商会がある。同商会の堀越善重郎氏は、東京高等商業学校の出身で、メーソン商会に入って、絹織物・段通・花筵等の直輸出業に従事していたが、独立したいという相談が私等にあり、明治27年2月に同商会を創立した。最初は順調にすすんだが、ある年米国の絹布需要が多く、機業家の利益が多かったので、翌年は日本商品が日米両市場に堆積し、市価が暴落し、購入原価の半ばにも及ばぬ惨状を呈し、かつ大統領の改選もあって、米国市場がとくに不景気となったので、同商会の営業は損失を重ね、非常の困難をみた。その後にもこうした困難に遭ったこともあり、堀越氏も一時は事業を中止したいとまで言いだしたが、自分は氏を奨励してその心を阻喪させないようにし、氏もまた丹精を尽くしたので、同商会の基礎が確立した。これらも困難に忍耐した報酬である（前掲書：34頁）。

30 逆境に処し辛苦に堪ふる心の持ち方

計画した目的を達せず、途中で失敗し、いわゆる逆境に陥ったときはどうするか。孟子は、梁の恵王に、「王歳を罪すること無くんば、斯に天下の民至らん」と言った。これは、政治の悪いことを言わず、年の悪いことにその罪を帰するの誤りを指摘したのである。民が服しないからといって、罪を凶歳に嫁して、自分の才徳の足らぬことを蔽うのは、みずから失敗する原因をつくりながら、その罪を天に帰すると同じである。

しかし、世の中には、自分が努力しても、意のままにならぬことがすくなくないものである。ゆえに一つのあきらめをもち、ある程度までは不平を堪えていかななくてはならない。自分は、幼少の頃、尾高藍香翁から、「辛いと思ふ観念を種々に考へ直して、辛いと思ふことも、それがかうなつたら更に辛いのであるが、これだけに止まつたのは幸だと思ひなほす」よう告げられたことがある。藍香翁は私の従兄で、兄とも師とも仕えた人である。この教訓が深く私を激励して、いかなる困難に遭い、あるいは失敗しても、私はさらに忍耐して努力することにした。こうして忍耐がおのずから習慣性ともなり、何事も大局をみて樂觀するようになる。辛いとか、苦しいとかいうことは、自分に固着しているものでなく、心の用い方によっては難儀たらぬものとすることができる（前掲書：35頁）。

『講話』の内容 (六) 堅実なる実業青年の戒むべき投機

31 一攫に得たる千金は又忽ち失ふ

各種の取引所は、商業期間として経済上重要視されているが、私は、相場で金を儲けることを嫌い、投機に反対するものである。渋沢家の家訓に、「凡そ事務は正經のものを撰みて之に就くべし、苟くも投機の業又は道德上賤しむべき務に従事すべからず」とあるのもこのためである。

『大学』に、「貨悖つて入るものは又悖つて出づ」とある。投機によって一攫千金の儲けをした金銭は、儲かるときには盛んな勢いでどしどし入ってくるが、損をしたとなるとまた盛んな勢いでどしどし出ていく。古来悪銭身につかずという俚諺があるほどで、正答ならぬ方法によって得た利得はけっして長くその人の手中にあるものでない。

たしか明治 40 年頃であったと思う。その頃の相場で四五十万円ばかり一時に利益した相場師があった。あるときその人が病床に就いたときに付き添った看護婦が、私が世話をしている東京養育院出身の孤児であった関係から、この人が養育院へ巨額の寄付をする気があると私に伝えられた。私は、そういう篤志は当人の功德にもなることゆえ、その人を兜町の事務所に招き、寄付の件を話したところ、なにか話の間違いであって、同人にはまったく寄付の意志がなかった。しかし私より諄々と説いたので、同人もその気になって二千元を寄付した。

その後、この相場師の友人が私を訪ねてきて、彼が二千元を養育院に寄付したのは非常な発奮で、この上寄付をさせようとしてもそれは不可能だが、同人は、昨今賭博がかった相場師をやめたい気になり、これを渋沢の前で誓って厳守するようにしたいと言っているから、同人に会って衷情を聞いてもらいたいとのことであった。殊勝な心がけだと思い、その相場師に面会し、同人は、私の面前で以後相場に手を出さぬと誓った。

これは、私が渡米する前の明治 42 年 7 月頃であったように記憶する。しかし同人は、やはり相場がやめられなかったとみえ、私が米国から帰って彼の近況を聞いたときは、せっかく儲けた四五十万円も、私の米国旅行の留守中にすべて損失してしまったとのことであった。一攫千金で得た金は俄然として出ていくものである (前掲書：35～37 頁)。

32 悪業も時に善業によつて償はれる

投機ばかりでなく、道德上賤しむべきことで儲けた資産は、長くその手中に残っていないのが常であるが、ときには長くその人の手中に留まっている例も稀にある。

悪銭を溜めた者でも、永久に不道德の所行を続けていくものとは限らない。善行を積むようになる者もある。また、いかに道德に反するような行為をする者でも、志までが悪であるとは決まったものでない。また行いは正しくとも、志の正しからぬ人もある。こういう人の溜めた金銭は、悪銭であっても、身について離れないようなことがある。それは、途中で善心に戻っ

て善業を積むことになれば、いままでの所行を帳消しにするのであろう。また志が正しければ、これも同じく帳消しとなることもあるであろう。また行い正しくて志の正しからぬ者も同様であろう。ともかく、不道德の手段で儲けた金は、自分一代はもちつづけることがあっても、子孫末代まで永続しうるものであろうかは疑わしい。

投機で利殖するほどの人は、おおむね優れた智慧を備えている。その智慧によって処世の方法を変え、家産をもちつづける者がある。たとえば五代才助、田中平八、今村清之助の諸氏の如きは、みな投機者流を免れぬところの名士である。田中氏は、みづから「天下の糸平」と称したくらいで、相場にかけては思いきったことをやったが、金儲け一片の相場師とはおおいに径庭があった。当時は公共の事業がなかったから、そうした事業に投資もしなかったけれど、こんにち今日生きていたならば、有益な用途には惜しまず寄付するであろうと思う。投機をしてもその性質がよかったから、これらの人々の子孫はいまも繁昌している。

ただ、単純に金を儲けるためにする投機は、一時はおおいに儲けることがあっても、後に失敗するのは、前に挙げた相場師の如きものである。兜町や蛸殻町に出入りして、一時おおいに羽振りのよかった者で、一敗また起ちえない者の例はたくさんある。貨悖って入るものはまた悖って出ずということは、けっして空論ではないから、青年のつねに戒めるべきことである（前掲書：37～38頁）。

33 正当なる商売と投機との異なる所以

私は、明治6年5月に退官して以来、わが国の実業の発展を唯一の目的とし、いやくもこの精神に反するものには反対した。商売は、売る者も買う者もともに利益を得るのであるが、投機はけっしてそうでない。買って利益を得た者があれば、売った者は、必ず買い手が儲けただけの額を損することになる。世間ではよく商売は平和の戦争であるというが、商売はけっして戦争でない。戦争には必ず勝敗があり、一方が勝って利益すれば、他方は負けて損失するに決まっている。商売で取引した者は、双方とも損失することなく、売る者も買う者もともに悦んでいる。これが、商売が投機とも戦争とも根本的に異なる所以である。

私はこういう意念であるから、相場の好きな友人に逢えばこれをやめるように忠告し、自分もまたいまだかつて一回でも相場をしたことがなく、また相場らしいことをしたこともない。自分は銀行や各種事業に関係を有っていたので、公債や株券を取りあつかうことは常人よりも多くあった。ここで相場すればおおいに儲かるなと思うことは幾回あったか知れない。しかし私は一回でも投機じみたことを為したことがない。

わが国の鉄道は、明治39年3月の法律で国有になることになったが、その買取代金は鉄道債券で、政府より被買取会社に交付されることになって、39年の暮から40年の春にかけて、金融逼迫からしてその債券がいちじるしく下落した。当時この債券を買いこんでおきさえすれば、後におおいに儲かるに決まっていたのである。

私は、銀行業者として、当時の金融状態を承知していた。また政府の財政が、公債を償還しないほどに窮乏していないことも知っていた。ゆえに、一時下落した鉄道債券の市価は必ず騰貴すべきことを察したのである。よって、第一銀行やその他の法人団体に勧めて鉄道債券を買わせておいたが、予想の如く騰貴し、これを買いかんでおいた人々は、これによってすくなくとも三割見当の利益を収めた。

買っておけばかならずも受かると決まっていたから、私は他に勧めて買わせたが、自身はただの一枚も鉄道債券を買わなかった。それには理由がある。騰貴するのを予想してこれを買いかみおき、騰貴したのを待ってこれを売って儲けたのでは、投機によって金儲けしたことになる。それが嫌いであったから、鉄道債券の低落したとき、これの買い入れを避けたのである。この鉄道債券の買い入れは、いずれの点よりみても危険の分子はないのであったが、確実であるというゆえをもって投機的に買いいれば、投機は絶対におこなわないという私の操守を破ることになると思って、眼前に利益があることを知りながらも、鉄道債券を買う気にならなかったのである (前掲書: 38 ~ 39 頁)。

『実践商業道德講話』の意義

ここまでみてきたように、渋沢は、道德と商工業者の事業とが不可分であることを力説している。また、両者を結びつけるのが「真の知識」であることを強調し、両者を切りはなそうとする思想傾向をひとつひとつ入念に潰している。こうした立論は、彼の事業実践とともに、長年にわたる俗説との思想闘争によって育まれたものであろう。

道德をもって身を律することは、渋沢にとって、損得を超えた問題であって、それは人間としての生きかたに係わっている。他人が投機行為をおこなうことには一定の寛容をしめしながら、自分自身はけっしてそれをおこなわないという姿勢に、とくにそれが鮮明にしめされている。たしかに、この『講話』は、「いかにして成功するか」という立身論の基調を崩してはいないが、「儲かればそれでいいのか」という渋沢の厳しい問いは、「精神」を喪失した末人たちの跳梁を激しく告発したヴェーバーの立論に通じている。

もちろん、渋沢は、さまざまな困難に直面しつつ筋を通し、そのなかでみずからの立身出世を獲得する術を探っているのであって、ヴェーバーのように、近代資本主義の隘路に正対し、その閉塞状況を打破しようとしたのではない。ヴェーバーは、みずからの本分に誠実に取りくむだけではけっして事態は打開できないという透徹した認識をしめしていた⁽⁵³⁾。知に依拠し、本分に尽くして忍耐し、成功を期せと説く渋沢と、主知主義の病理を暴き、みずからの持ち分の外に立って闘争することを説くヴェーバーとの差異は歴然としているが、それでも、精神なき資本主義にたいして渋沢が抱えている危機意識は、1920 年代の時代状況の一端をかなりよく捉えていると思われる。

ヴェーバーの描いた歴史的個体たる資本主義の「精神」が、特定の時期に、特定の地域で、

旧い経済体制を打破し、新たな体制創出を実現させる推進力を与えたのにたいして、渋沢の生涯を賭けた取り組みは、——その知名度と出版物等による広範な影響力にもかかわらず——日本の多くの実業家に顧みられることがなかったようにみうけられる⁽⁵⁴⁾。渋沢のかかる屹立・孤立は、戦前日本資本主義の問題性を考察するうえで、ひとつの手がかりを与えてくれるように思われる。こうした論点については、他の論客たちの議論や戦前日本経済の動態と関連づけながら、ひきつづき掘りさげていきたい。

（完）

〔注〕

- (52) 売買の約束を結びながら相場が下落したために品を引きとらなかった不正事例として、渋沢が念頭に置いているもののなかに、木村利右衛門のケースが含まれていると思われる（野崎敏郎 2000：199～201頁）。
- (53) こうしたヴェーバーの論点については、拙著『ヴェーバー『職業としての学問』の研究』（晃洋書房刊）の「研究編」を参照。
- (54) しかし、渋沢の訴えに耳を傾けた者がいなかったわけではない。たとえば、長谷川才蔵（1906年生）は、この『講話』を熟読し、社会にたいする責任と、信用の重視とを説く渋沢の立論に感銘を受け、その後1929年に直方市で長谷川仏具店（現・株式会社はせがわ）を創業し、信用を社是として掲げ、やがて全国展開を果たす（http://www.ichibankan.com/ja/interview/no021_01.htm）。こうした事例に注目する必要がある。

〔文献〕

渋沢栄一 1923c『実践商業道德講話』実業之日本社

野崎敏郎 2000「日本人の商業道德と黄禍論——日本資本主義精神論争への忘れられた前哨——」歴史と方法編集委員会編『歴史と方法4 帝国と国民国家』青木書店

野崎敏郎 2015『ヴェーバー『職業としての学問』の研究』晃洋書房

〔付記〕

本稿は、平成23～25年度科学研究費（基盤研究（C））、および平成26年度佛教大学特別研究奨励費による研究成果の一部である。

（のぎき としろう 公共政策学科）

2015年10月26日受理